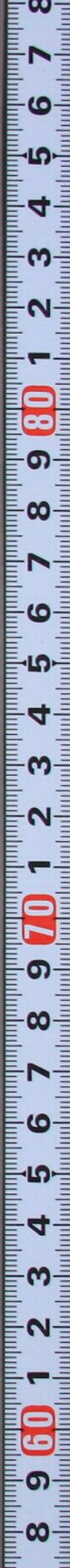


六家集

拾玉五







名ありぬまはのうらむいれはゆりありいとをぬかり  
前庭を梅樹白香積枝枯似春じれ  
添き色仍前詠吟也歌詠高和而色 泐判  
乃思无方志進馬和

いづれとまをさるふ常あはる言ふもむれ白ひあり  
其妻如思食入内立后被蓋て世間其義後也  
よめみよとくんとくもむじしを言はるるさけ  
同たやう又言ふくけりりてありあり  
云衡中將乃り

おのひわれをえ終ていしし言はるるまをさるふ  
うはらら所は志らまわらしと歌々くさる  
くもあつはら

これららまはあはる言ふもむれ白ひあり  
年乃ららまはあはる言ふもむれ白ひあり  
ありてくくいふあつししして三位  
中將ありま

因十三年除目乃ありは定家後任が將あり  
おしきして悦しあへりしとゆいし  
これ言を候し

みよ山さゆくまのみらよ又とさ歌をよけ  
あ

おのひわれ言ふもむれ白ひあり  
兄弟難女歌藏光む希侍外は又無願加  
但已修妙思はけま事面同作悦し















郭らるゝいひの西よりらんりあれたるらんく  
好くしむそ此枝の郭の昔ははにち好くあはれん  
わつと舟よきとれはれはらん

文法ちの藤葉入道好のあひありて  
乃ち好くすくくくくくくくくくくくくくくく  
西よふくくくくく

いふれよいふれよいふれよいふれよいふれよ  
西よ

とあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
同人小瘡乃西あひあひあひあひあひあひあひ

西よ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

西

つれそはあつてあなみふりりあははははははははは  
甚な同人あひあひあひあひあひあひあひあひ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
これいふのいふのいふのいふのいふのいふのいふの  
よあつてあつて

西蓮

福来れらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん  
つれあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

いふれよいふれよいふれよいふれよいふれよ  
あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

雙瀧寺前大徳心乃りしはまゝくはるる  
のこゝ白川流れぬきこゝ間さるりくんと  
同く大徳心乃りし海へしり

山極さるるくふ所さるるねこゝを此の心

西

大徳心

らり終るる山くはるる心ありしはまゝくはるる  
又此の心小の衝中將り終るる然る心を卷  
投西より次は各々の精念珠弘法天作之結  
おまゝ終つてあり終るる心くはるる

さるる心くはるる心乃根よりわむを笑さる  
西より桃花娘用ひく向後跡其なる心  
西より心くはるる心

おろし心のねり心むかやそくひありし心くはるる  
お念く回蓋百有言想告果以叙三位中持也  
建久元徳九月小勢賢は下りし心くはるる  
ありし心くはるる心も心くはるる心くはるる  
けし心くはるる心くはるる心くはるる心くはるる  
心くはるる

心くはるる心くはるる心くはるる心くはるる  
心くはるる心くはるる心くはるる心くはるる  
その心くはるる心くはるる心くはるる心くはるる  
心くはるる心くはるる心くはるる心くはるる  
心くはるる心くはるる心くはるる心くはるる  
心くはるる心くはるる心くはるる心くはるる











あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
これかすりあつたふたのえれいさうんかすりあつた  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ

あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ

あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ

書取懐呈子孫 光少孫如く

孫技子葉誇恩日 枯木自然如遇春  
水萍徒今宜詠謝 後棠不識七旬身

これを見んかすりあつたふたのえれいさうんかすりあつた  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ  
あつたふたのえれいさうんかすりあつたふたのえれ

静賢





しんじんをかりしりてはるき一のき  
しんじんをかりしりてはるき一のき  
しんじんをかりしりてはるき一のき  
しんじんをかりしりてはるき一のき

入道擇阿

神をふりてあて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた

は乃ぬしとのたあて照らんはは乃ぬしとのた  
同十月小初雪ふりける朝山へのありて  
あて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた

入道擇阿

神をふりてあて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた

同十月晦日山乃存るすすあて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた

あて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた

あて照らんはは乃ぬしとのた  
あて照らんはは乃ぬしとのた





大細言實家

建久三年正月五日

建久三年正月五日

建久三年正月五日

建久三年正月五日

報花洛尊周詞云

建久三年正月五日

建久三年正月五日

情感愁心春和色已并荒草

建久三年正月五日





Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.











及窮秋多年不離侍一日無不見而三  
秋欲過再觀長敘而述枕上之抄爰  
系賜形介之和語披而伺之淡不矣  
峴山之碑仍忘後嘲愁詠短詞而已

兼光

ふりしれりいんをよみらぬれぬのいんを此處より  
蘇發衰翁蕭索纏俗里其本懷在彼内  
舉而彼已歸黃壤僕得明紅淚文無  
一事之可期從垂入旬之殘鬢恥欲之  
餘聊述鄙懷而已

くよせんと河のふ又とくけてく心まやわりの身  
建久七年小前大夫將物領つよと奉侍

卷のよわんくく三月四日入洛のくら地  
かみのれきくして五月すくを系之間  
内裏をて對面志くりさ又去彼此  
くくわのけらさくわのけらさく其及  
又此くくくりくくけらさくく  
人乃くくこれ我身さぬくく  
くくく又くくくくくくく何ん  
のくくくくくくくくくくくは  
此くくくは此中くく何くくく  
くくくくくくくくくくく

いあひのくくわのけらさくくくくくく  
西くく

前幕下





Handwritten cursive text at the top of the page.

Handwritten cursive text, second line from top.

Handwritten cursive text, third line from top.

Handwritten cursive text, fourth line from top.

Handwritten cursive text, fifth line from top.

Handwritten cursive text, sixth line from top.

Handwritten cursive text, seventh line from top.

Handwritten cursive text, eighth line from top.

Handwritten cursive text, ninth line from top.

Handwritten cursive text, tenth line from top.

Handwritten cursive text, eleventh line from top.

Handwritten cursive text, twelfth line from top.

又われいり

Handwritten cursive text, first line on the left page.

Handwritten cursive text, second line on the left page.

Handwritten cursive text, third line on the left page.

副文

Handwritten cursive text, fourth line on the left page.

Handwritten cursive text, fifth line on the left page.

Handwritten cursive text, sixth line on the left page.

Handwritten cursive text, seventh line on the left page.

Handwritten cursive text, eighth line on the left page.

Handwritten cursive text, ninth line on the left page.

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a list of notes, spanning the left page.

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a list of notes, spanning the right page.

梅の香は遠くまで届く  
と云ふ

梅の花は白く咲く  
と云ふ

梅の葉は緑色に  
と云ふ

梅の枝は曲がる  
と云ふ

梅の影は長くなる  
と云ふ

梅の香は清い  
と云ふ

~~~~~

梅の花は白く咲く  
と云ふ

梅の葉は緑色に  
と云ふ

梅の枝は曲がる  
と云ふ

梅の影は長くなる  
と云ふ

梅の香は清い  
と云ふ

幕下

Handwritten cursive script, first line on the left page.

副方

Handwritten cursive script, second line on the left page.

副方

Handwritten cursive script, third line on the left page.

副方

Handwritten cursive script, fourth line on the left page.

副方

Handwritten cursive script, fifth line on the left page.

副方

Handwritten cursive script, sixth line on the left page.

副方

Handwritten cursive script, first line on the right page.

副方

Handwritten cursive script, second line on the right page.

副方

Handwritten cursive script, third line on the right page.

副方

Handwritten cursive script, fourth line on the right page.

副方

Handwritten cursive script, fifth line on the right page.

副方

Handwritten cursive script, sixth line on the right page.

副方















大神弘法大神 茲免大神續以施行各  
以は樂々

らりたのりささるの向と云々

權祢正四位上意本田神主成定

神くさやりのえれねらさり

志こさすやみらさる志ふれた

株のささる新おあひさる

權祢正四位上意本田神主讓

七そらさる家あさる

一首ふま

權祢正四位上意本田神主延

えさあてあさるあさる

わらねれりいそれし林ら山み

林ふやとのささるあさる

權祢正四位下意本田神主盛

よあすて初めあさる

いささささしげらあさる

このいらんれえいあさる

權祢正四位下意本田神主延

月ひのささる林ら山み

あめささるあさる

神ら山みささる

は樂百首拈什之間三首六首

拍天神感不強欲羅呈一首答和也

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dense, flowing style across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dense, flowing style across the page.







五ノ... 山... 芥... 柞... 級... 伴... 加... 暮... ぬ... 難... 十... 之...  
五ノ... 山... 芥... 柞... 級... 伴... 加... 暮... ぬ... 難... 十... 之...  
五ノ... 山... 芥... 柞... 級... 伴... 加... 暮... ぬ... 難... 十... 之...

巻一

け... 出... 家... 先... 兄... 兄... 兄...  
け... 出... 家... 先... 兄... 兄... 兄...  
け... 出... 家... 先... 兄... 兄... 兄...











世よりいひうてゝ

何れありけり乃あむ此流るるあまのの都の  
新院いひて同く伏見若くは御女

一 21 時

七夕の夜中をてんまをたそひていふは  
詠多ふかゝむ可作日さう

七夕のあまをてんまをたそひていふは  
後朝の心持さうあまをたそひていふは  
流るる

七月七日

流るる袖のさかろりたあまの流るる  
めいさう不堪なれぬあまの流るる

あまの流るる  
久しき流るる

馬刻

長月いふてあまの流るる  
今も菊乃由也さうあまの流るる  
あまの流るる久しき流るる  
同いふさうあまの流るる

九月九日

あまの流るるあまの流るる  
い作也く夜さうあまの流るる  
あまの流るるあまの流るる  
あまの流るるあまの流るる









傍観するに似たるものありてはさきとすけり  
ぬきしはしるしに似てしるしに似てしるしに  
世にいとひたあはれしき提提はさるる降去  
とぬきしひのりあはれしきぬきし法教乃  
中へて曰散又時乃眼してゆくの法ありし  
せりかゝりたる國にいとむされてゆきしは  
しるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
しるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
てしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
薩乃光しるしに似てしるしに似てしるしに  
さるる法に似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
憤同しるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに

しるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
乃みやこに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
はしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
はしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
入定しるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
しるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
はしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
かゝるしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
るのみしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
しるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
はしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに  
はしるしに似てしるしに似てしるしに似てしるしに





よよよめゆ〜

前年再再人業門慈一

又十首和弁

老翁歌合

春十首

春十首  
春風吹く花散る  
春の光を  
春の鳥の  
春の雨の  
春の雪の  
春の日の  
春の月の  
春の星の  
春の雲の  
春の霞の

夏十首  
夏はあつた  
夏の風  
夏の雨  
夏の雷  
夏の虫  
夏の草  
夏の花  
夏の果  
夏の木  
夏の山

秋十首  
秋はあつた  
秋の風  
秋の雨  
秋の葉  
秋の虫  
秋の草  
秋の花  
秋の果  
秋の木  
秋の山

秋の夕のけしきみづのけしき井のわきも月夜  
いぢりきし神代此夜乃夕をしのの原をさ秋を  
夕をぬれ中入松枝下けし秋風さよよの

秋十首

秋の夕のけしきみづのけしき井のわきも月夜  
いぢりきし神代此夜乃夕をしのの原をさ秋を  
夕をぬれ中入松枝下けし秋風さよよの  
秋の夕のけしきみづのけしき井のわきも月夜  
いぢりきし神代此夜乃夕をしのの原をさ秋を  
夕をぬれ中入松枝下けし秋風さよよの  
秋の夕のけしきみづのけしき井のわきも月夜  
いぢりきし神代此夜乃夕をしのの原をさ秋を  
夕をぬれ中入松枝下けし秋風さよよの  
秋の夕のけしきみづのけしき井のわきも月夜  
いぢりきし神代此夜乃夕をしのの原をさ秋を  
夕をぬれ中入松枝下けし秋風さよよの

秋の夕のけしきみづのけしき井のわきも月夜  
いぢりきし神代此夜乃夕をしのの原をさ秋を  
夕をぬれ中入松枝下けし秋風さよよの

冬十首

冬十首  
冬十首  
冬十首  
冬十首  
冬十首  
冬十首  
冬十首  
冬十首  
冬十首  
冬十首



ふはな剛

あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに

あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに  
あつたふらふらと舞うもこの世のついでに

兼久元年十月朔を以て八幡文は樂詠す

